

《特別寄稿》

信用貨幣論と表券貨幣論に関する断章

結 城 剛 志

はしがき

泉 [2013] が簡潔にまとめているように、現代の不換銀行券をめぐる「不換銀行券＝国家紙幣説」(InCBN-CrM)と「不換銀行券＝信用貨幣説」(InCBN-St)という2つの理解が対立している⁽¹⁾。とはいえ、大本をたどれば両説は貨幣の本質を商品貨幣(CmM)と規定する商品貨幣論者であるという点で一致している。問題は、「金貨幣(物品貨幣)に基づいて信用論を構成し、兌換銀行券を導出する貨幣・信用論の組み立てからすれば、不換銀行券を信用貨幣と捉えることは論理の一貫性を欠くこととなり【原理的に】承服しかねる」(同上書、15頁)という一点にある。いいかえれば、商品貨幣論は正しいが、現代の不換銀行券制度が商品貨幣論の論理上に位置づけられるのか、という問題である。

戦後の研究史をふり返れば、この問題にたいする理論的な研究が着実に積み重ねられてきたといってよい。その上で、現代的に挑戦されなければならない問題は以下の3点であるように思われる。

第1に、商品貨幣を〈商品＝物品(CmMc)〉としての金が貨幣になる、という金貨幣(物品貨幣)として理解する〈商品＝物品＝金貨幣論(CmMg)〉である。これは貨幣本体が金であることを強調する立場である。この理解に基づけば、銀行券とは金との兌換の約束された金債務証券(CBNg)となり、金との兌換が切断された不換銀行券は非信用貨幣(不換紙幣)となる。ここに、国家紙幣説(InCBN-St)に至る第1の気孔が開く⁽²⁾。第1の説を〈商品＝物品規定説〉と呼んで

おこう。〈商品＝物品規定説〉を貫徹するならば、物品債務証券としての兌換銀行券も論理的には可能であると思われるが、この説では金が貨幣形態の位置に落ち着くと一般に理解されているので本稿ではこれ以上詮索しないことにしておく。

第2に、物品と商品を理論的に区別する立場からすれば、現代の不換銀行券においても、中央銀行が商品資産を有し、債務証券としての銀行券は中央銀行資産を表現している、という意味で信用貨幣(InCBN-CrM)と解釈しうる。第2の規定では、商品と物品との混同を免れ、商品規定(CmMv)に純化している点で理論的に徹底しているとはいえ、依然として問題を残している。それは、中央銀行が抱える資産の内実に関わる。表2に明らかのように、日本銀行の資産を閲覧してみると、その資産の大部分を国債に負っている(総資産の約62%)。もちろん、国債は市場で売買されているかぎりでは純然たる商品に違いなく、現代の不換銀行券が信用貨幣と解される場合の1つの根拠になっている。実際、国債は商品経済的な富を源泉とする国家の歳入によって償還されているし、銀行券の発行・償還は国債の売買を通じて行われている。だが、国債の償還過程における国家の介入に力点を置けば、国債商品の存在は、むしろ、信用貨幣説への反証に映る。国債は商品経済的富の国家権力による収奪という非商品経済的論理の介入によって維持されている特殊な商品であるためだ⁽³⁾。ここに、国家紙幣説への2つ目の気孔が開いている。

さらに、いずれの資産が中央銀行の負債を本質的に支えているのか、という問いをめぐるはいくつかの解釈が乱立している。金債務証券の立場

では金地金が支えているはずであり、商品債務証券の立場では国債が支えているはずである。たしかに、中央銀行資産に占める金と国債の比率は1：198であり、国債が中央銀行資産を実質的に支えているといえそうであるが、本質規定において量的比率がどの程度重要なのかということは必ずしも自明ではない。とはいえ、4,412億円の金が1,167,391億円の信用貨幣に対応しているということも難しいかもしれない。

不換銀行券において、債権者が中央銀行にたいし債務の供出を求めたとしても応じられることはないため、いずれの資産が実際に中央銀行券の購買力を担保しているのかを実証することは困難である⁽⁴⁾。また、商品債務の規定を一般化するならば、金や国債などの個別の商品にその本質を特定するのは無意味である。その意味では、中央銀行が有する総資産という合成商品を考える必要もあろう。これは兌換時に約束されているものは何かという論点に関わる。すなわち、1円＝純金2分という兌換が約束されている場合、額面通りに読めば純金2分という物品での債務履行が約束されていると解釈されるべきであろうが(CBNg),

それは純金2分の価値による支払約束であるという規定と二重になっているとはいえないだろうか(CBNv)。つまり、金による支払いが困難な場合、他の保有資産を放出するほかなくなるのではないかと、ということである。

第3に、兌換銀行券を金債務証券として理解する場合でも、金債務という債務の性格ではなく兌換それ自体の契機を重視する立場がある。つまり、中央銀行券が金債務であれ銀債務であれ貴金属等の商品債務(CBNc)であればよいのであるから、いずれの商品＝物品であるかには関わりなく、むしろ、それによる債務の履行を強調する立場である。またかりに、銀行券が中央銀行の資産価値を表現しているのだとしても、不換銀行券には債務履行(実現)の手段がない。商品の価値は、信用貨幣によって直接に表現されるのか、それとも、商品貨幣によって直接に表現されるのか、という問題もある。さしあたり、信用論(CT)のように、中央銀行券を貨幣と見なすならば、不換銀行券が直接的に表現していることになろう。この論点は、債務性の強調に着目すれば貨幣・信用論(MCT)に結実するが、債務の不履行性に着目す

表1 不換銀行券の理解をめぐる概念の系譜図

商品貨幣 Commodity Money (CmM)	商品(物品・非物品を含む) (CmMv)	信用貨幣 Credit Money (CrM)	商品の債務証券 (CrMv)	兌換銀行券 Convertible Bank Notes (CBN)	商品貨幣(価値)の引き渡し (CBNv)	不換銀行券 Inconvertible Bank Notes (InCBN)	信用貨幣(還流法則, 中央銀行資産) (InCBN-CrM)	貨幣・信用論 Money-Credit Theory (MCT)
	物品(非物品を除く) (CmMc)		物品の債務証券 (CrMc)		商品貨幣(指定物品)の引き渡し (CBNc, CBNg)		国家紙幣(不換, 非商品経済的論理の介入) (InCBN-St)	信用論 Credit Theory (CT)
	金 (CmMg)		金の債務証券 (CrMg)					国家紙幣論(非信用論) State Money Theory (SMT)

表券主義 (Cartalism)

表2 日本銀行のバランス・シートに見る商品の配置⁽⁶⁾

(単位：億円)

資産		負債	
金地金	4,412	発券銀行券	808,428
国債	872,471	預金	358,963
計	876,883	計	1,167,391
その他	—	その他	—
		総負債	1,362,415
		純資産	32,153
総資産	1,394,569	総負債と純資産の和	1,394,569

れば信用論としての信用貨幣論と、国家紙幣論に
分岐する。ここに国家紙幣論に至る3つ目の気
孔が開く。ただし、かりに、現代の不換銀行
券が信用貨幣論の文脈で説明しえない現象
であるとしても、一足飛びにその存立根拠を
国家に求めなければならない理由はないの
ではないだろうか。それに、国家紙幣として
理解すればすべての問題が解消されるわけ
でもない。現代の不換紙幣が国家紙幣であ
るならば中央銀行は不要なはずであり、生
粋の国家紙幣論者が主張するように国（財
務省）が貨幣供給を管理すればよいはず
である。

不換銀行券の理解をめぐっては、信用貨幣
論とは異なる文脈で金属貨幣を直接に批
判する表券主義学説がある（Schumpeter
[1954]）。表券主義の内実については今
後検討していく必要があるが、さしあた
り、本稿では貨幣の本質を非金属・非物
品に求める学説を表券主義と呼んでおこ
う。

表券主義学説に関する先行研究

マルクス（Marx, K.）は「イングランド
銀行が兌換を停止していた時期には、戦況
報告よりも多数の貨幣理論が生まれたほど
だった」（Marx [1859] S. 64; 64 頁）と
述べ、1819年にバーミンガムの銀行家
アトウッド（Attwood, T. 1783-1856）
と後の首相ピール（Peel, R. 1788-1850）
との間にはじまった「観念的貨幣尺度
（ideale Geldmaß）にかんする論争」（*ibid.*）
をあげている。また、春井は、兌換停止
以降の「イギリスは金融理論や金融政策
に関するほとんど不断の論争

を経験した」と述べ「貨幣本位論争」を
含む様々な論争をあげている（春井
[1986a] 1 頁）。アトウッドとピールの
論争は、それぞれ金本位制反対論と金本
位制擁護論とを代表しており、本位
（standard, standard of value）を
めぐる論争をなしている⁽⁶⁾。マルクスの
整理によれば、この本位をめぐる論争、
あるいは「観念的貨幣尺度にかんする
論争」は、理想的な本位を模索しながら、
最終的には「労働時間が貨幣の真の度
量単位」とするグレイ（Gray, J. 1799-
1883）の「労働貨幣」論に帰着する
という特異な見解が示される（Marx
[1859] S. 66, 68; 66, 68 頁）。だが、
必ずしも本論争の争点が労働に収斂す
るわけではない。これはマルクス価値尺
度論を論争の着地点とした場合にのみ
妥当な解釈である⁽⁷⁾。

論争の発端は1815年に終結したナポ
レオン戦争後の経済的混乱にある。この
論争は、戦後に生じた諸商品の広範な
価格低落と地金の市場価格の高騰、そ
して、信用の引締めによる市中の農業
・商工業者の資金不足と戦費国債の購
入者などの債権者にとっての有利な状
況とを背景としながら、1821年に兌
換再開の完全実施によって確立された
金本位制の是非を問う内容となっている
⁽⁸⁾。このような社会状況を反映した論
争の主要な論点は以下の点である。ま
ず、素材価値の変動によって物価の安
定を損ない、かつ債権債務関係を混乱
させる原因となる金が価値尺度として
適切であるか否かという問題である。
これにたいして、金本位制の反対者
（表券主義者）たちは、金のように価
値が変動する商品は価値尺度として不
適切であり、

物価と債権債務関係の安定のためには不変の価値尺度が必要であると説いている。そして、信用逼迫の原因が金本位制への復帰にあるという認識から、銀行券の発券は金準備に制約されるべきではないと主張するのである。信用の収縮は消費を減退させ過少消費型の恐慌を引き起こし、商工業者の販売不振は失業者の増大をもたらすためである。

バーミンガム学派を代表するアトウッドに関する先行研究では、マルクスの「観念的貨幣尺度説」(Marx [1859] S. 64; 64 頁) やホートリーの「インフレーションニズム」(Hawtrey [1928] p. 64; 6 頁) という評価がある。近年の研究では、西沢 [1984, 1994], 春井 [1986a, 1986b] らによってケインズの有効需要創造論の先駆として評価されている。ホートリーの「インフレーションニズム」という規定は、金本位制から離脱し紙券本位制へと移行した場合に、インフレーションの昂進を抑制するような管理通貨制度が構築できないとする古典派の見解に基づく。このような古典派からの批判にたいして、バーミンガム学派はアトウッド以降、様々な代替的本位を提起してきた⁹⁾。

観念的な貨幣学説をめぐる概念の整理

とはいえ、マルクスの「観念的貨幣尺度説」に関する説明はそれほど明確なものではない。『経済学批判』(1859)の「第2章 貨幣または単純流通 1 価値尺度」に続く「B 貨幣の度量単位にかんする諸理論」中には「観念的貨幣尺度説」のほかにも「貨幣の観念的度量単位説 (Lehre von der idealen Maßeinheit des Geldes)」(Marx [1859] S. 59-60; 59 頁) という規定も存在している。同節において、「貨幣の観念的度量単位説」はステュアート (Steuart, J. 1713-80) に代表させられ、「観念的貨幣尺度説」はアトウッドに代表させられている。そして、それらの論争の帰結としてグレイの労働貨幣論に言及されるのである。本論争をめぐるのは、価値尺度、度量単位、度量標準の内実が問われ、その上で、観念的なそれらの所説に言及されている。したがって、以上のマルクスの規定を理解するためには、価値

尺度、度量単位、度量標準の概念化から取り組む必要がある。

マルクスは「第2章 貨幣または単純流通」の考察に際して「以下の研究でしっかり把握しておかなければならないことは、商品の交換から直接に発生する貨幣の諸形態だけを問題にし、生産過程のもっと高い段階に属する貨幣の諸形態、たとえば信用貨幣のようなものは問題にしない、ということである。簡単化のために、どんな場合でも金が貨幣商品であるとしておく」(ibid., S. 49; 48 頁) と慎重に断った上で、その「1 価値尺度」の冒頭において、「流通の最初の過程は、現実の流通のための、いわば理論的な準備過程である。使用価値として実在する諸商品は、まずはじめに、それらが互いに観念的に交換価値として、対象化された一般的労働時間の一定量として現れる形態を自分で創造する。この過程の最初の必要な行為は、われわれがすでに見たように、諸商品が独特の一商品、たとえば金を、一般的労働時間の直接的な物質化したもの、すなわち一般的等価物として排除することである」(ibid., S. 49-50; 48 頁) と述べ、価値尺度としての金を導出する。いうまでもないことであるが、価値尺度とは、商品の価値を量る尺度単位である。マルクスによれば、価値は商品に対象化された一般的労働時間の量によって与えられ、その量は金に対象化された一般的労働時間との間接的な比較によって量られる。

一般的等価物としての金は、「価値としては、それらは同一であり、同一の労働の物質化したもの、または労働の同一の物質化したもの」であり、「同一の労働の一樣な物質化したものとしては、それらは、ただひとつの区別、すなわち量的な区別だけを示している」(ibid., S. 50; 48 頁)。すべての商品が自らの価値を金の量で量るということは、商品が「金としての一般的労働時間そのものと関係すること」であり、したがって、「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい労働時間をふくんでいる割合におうじて測るから、金は価値の尺度 (Maß der Werte) となる」のである (ibid., S. 50; 48-9 頁)。そして、「このように独特な一商品で一般的等価

として、同時にまたこの等価の度盛りとして表現された、言いかえれば、諸商品と独特な一商品とのただひとつの等式で表現された諸商品の交換価値が、価格である。価格とは、諸商品の交換価値が流過程の内部で現れる転化形態である」(ibid., S. 51; 49 頁)。要するに、価格とは商品と金(一般的等価物)との交換比率である。ただし、先に述べたように、一般的等価物が金とされているのは行論上の仮定にすぎない。なんらかの商品を尺度にとれば金価格、小麦価格、鉄価格などによって商品の価値を表示することができるためである (ibid.)。

さて、商品に対象化された労働時間が価値を規定するのだとしても、生産者が直接に知ることができるのは商品に対象化された個別的な労働時間だけである。ところが、価値を規定するのは一般的な労働時間である。それだから、価値量を知るためには一般的等価物との等置を通じて、商品に対象化されている労働時間と一般的等価物に対象化されている労働時間とを比較し、交換によって確定しなければならないのである。つまり、商品の価値は対象化された労働時間の絶対量として与えられるのではなく、交換を通じて事後的に、対象化された労働時間が同質化されることによって措定されるのである。具体例をあげれば、1 トンの鉄と2 オンスの金が等置され、交換されることによって、それらに含まれている労働時間が、したがってまた価値量が等置され、確定されるのである。この点について Marx [1859] の用語法にしたがえば、等置 (Gleichsetzung) とは価値の価格への転化であり、交換とは個別的労働の一般的な労働への外化 (Entäußerung) である。ここでマルクスが価値尺度を等置 (表現) と外化 (実現) の2機能に区分している点は重要である。

交換過程における価値尺度の概念的区分は後に述べる「観念的貨幣尺度説」や「貨幣の観念的度量単位説」にたいする批判に通じている。結論から先に述べれば、「あたかも貨幣が諸商品を通約可能なものとするように見えるのは、流過程のたんなる外見にすぎない。むしろ対象化された労働時間としての諸商品の通約性こそが、金を貨幣

にするのである」(S. 52; 50 頁)。それゆえ、マルクスの整理によれば、「観念的貨幣尺度説」や「貨幣の観念的度量単位説」などと呼ばれる観念的な貨幣学説は、通約可能な尺度単位を任意(観念的)に決めさえすれば商品の価値を量ることができる」と述べていることになるが、それは「流過程の外見」に惑わされた見解である。価値の通約可能性は対象化された労働時間によって与えられているため、価値のない、表現のみの価値尺度は成立しえないためである。

なぜ観念的な貨幣学説は「流過程の外見」に惑わされてしまうのか。その理由は、マルクスによれば、商品の価値の実体と形態の区分について認識しえず、いいかえれば、社会関係の歴史的な発展段階によって形成される知覚しえない対象と具体的な形態によって現前させられる知覚可能な対象とを概念化しえず、それにともなって、価値表現(等置)と価値実現(外化)の2契機を析出できず、それゆえに、実体論と実現論の欠落によって、価値尺度が、価値表現という「流過程の外観」によってのみ成り立っているかのように理解しているためだ。観念的な貨幣学説においては、価格さえ与えられれば諸商品は交換されるから、価格は商品の相対価値を量りうる尺度単位でありさえすれば、理論上は、どのような実体的な商品でも、あるいは観念的な尺度単位でも構わない、といわれるのである。しかし、実際上は、実体的な貨幣商品はそれ自身の価値変動によって価値尺度を乱すと理解されるために除外される。

ここで金を例にとり、不変の価値を表示するような貨幣商品を考えてみよう。貨幣商品金の価値はその素材価格の変動によって変動する。したがって、一定量の金重量を示す価格の度量標準——たとえば、1 ポンド——が示す価値は変動する。1 ポンドが不変の価値を示すためには、1 ポンドと価値量との関係を固定し、金属重量との関係を可变的にしておかなければならない。しかし、貨幣商品の一定量とではなく、抽象的な価値との関係を一定に保つというのは至難の業であろう。

「諸商品が交換過程にはいりこむ現実の姿は、

それらの使用価値の姿である。諸商品はその外化によってはじめて現実的な一般的等価物になるべきものである。商品の価格規定は、商品の一般的等価物へのたんに観念的な転化であり、依然としてこれから実現されなければならない金との等置である。しかし商品は、その価格においては、ただ観念的に金に、またはただ表象された金に転化されているにすぎず、商品の貨幣存在はその実在的存在からまだ実際には分離されていないのであるから、金はいまなおただ観念的な貨幣に、ただ価値の尺度に転化されているにすぎず、一定量の金は、実際にはまだただ一定量の労働時間にたいする名称として機能するにすぎない。金が貨幣として結晶する形態規定性は、いつでも、諸商品が互いにそれ自身の交換価値をあらわしあう一定のしかたによって決まるのである」。(ibid., S. 52-3; 51 頁)

価値量は一般的労働時間の量によって措定されるとはいえ、価値に直接の単位はないのだから、価格は価値の量を表示する媒体の量によって表示されなければならない。少なくとも単純流通の理論レベルでは媒体自身が価値物であるということが重要である。価値表示媒体から切断された観念的な価値の尺度単位——それはおそらく、Marx [1859] にとっては無価値物による尺度単位を意味する——純粋な計算貨幣が可能か、という問題でもある。

度量単位と度量標準については次のように言及される。「金が価値の尺度となり、交換価値が価格となっていった過程を前提すれば、すべての商品は、その価格においては、さまざまな大きさのただ表象された金量であるにすぎない」。したがって、「諸商品を度量単位 (*Maßeinheit*) としての一定量の金に関係させる必然性が技術的に発展し、この度量単位は可除部分に細分され、その可除部分がさらにその可除部分に細分されることによって、度量標準 (*Maßstab*) にまで発展させられる」。つまり、度量単位とは、商品の価値を金の量で量るための金の重量単位である。度量単位と度量標準の区別は「諸商品を度量単位としての一

定量の金に関係させる必然性が技術的に発展」して行くという便宜的な事情から生じると説明されている。ところが、「この度量単位は可除部分に細分され、その可除部分がさらにその可除部分に細分されることによって、度量標準にまで発展させられる」という一文は判然としない。可除部分がさらに可除部分に細分されることで度量単位は度量標準になるのだろうか。そうだとすれば、度量標準は度量単位をたんに細分化しただけの尺度単位にすぎない。さしあたり、金の度量標準を定めれば商品の価値は金の度量標準で数えあげることができるだろう。そのとき、「金は価値の尺度から価格の度量標準に転化する」のである。(ibid., S. 54; 53 頁)

本質的な区別は価値尺度と度量標準の間にある。これらの混同が観念的な貨幣学説をもたらしたといわれているからである。「価値の尺度としての金と、価格の度量標準としての金とは、まったく違った形態規定性をもつのであって、その一方と他方との混同は、はなはだばかげた諸理論を生みだしてきた。金は、対象化された労働時間としては価値の尺度であり、一定の金属重量としては価格の度量標準である」(ibid., S. 55; 53 頁)。

別の箇所では、「こうして金属重量の貨幣名は、その一般的な重量名から歴史的に分離したのである。貨幣単位、その可除部分およびそれらの名称の決定は、一方では純粋に慣習的なものであり、他方では流通の内部で一般性と必然性という性格をもたなければならないから、それは法律上の規定とならなければならない。だからその純形式的な業務は、政府の仕事となった」(ibid., S. 56; 54-5 頁) と述べられている。この一節では、「法律上の規定」として度量標準が与えられることに言及されている。「貨幣単位、その可除部分およびそれらの名称の決定は……純粋に慣習的なもの」として形成され、その名称が流通の内部で一般的に通用するためには法律的に定められる必要があるということであろう。その意味で度量標準の制定は任意的である。

さて、先に述べた不変の価値尺度論とは、現実の金の量によって表示される価値が可変的である

ことに価値尺度としての瑕疵をみて、一定量の金は常に同量の価値を表さなければならないということを中心とする理論である。マルクスは、それは価値尺度と価格の度量標準を混同するものだというのである。価値尺度としての金は価値の通約可能性を担保し、度量標準としての金は価格の通約可能性を担保しているのであるから、貨幣価値の変動は価格の価値比例性を歪めるものではないためである。ところで、観念的な貨幣学説が問題視したものは価格の価値比例性にあったのであろうか。

Marx [1859] は、ステュアートに代表される観念的な貨幣学説を「貨幣の観念的度量単位説」と規定し、以下のような批判を展開している。さしあたり、「貨幣の観念的度量単位説」とは、「価格規定にあっては、ただ表象された (vorgestelltes) 金か銀かが機能するだけであり、金と銀はただ計算貨幣 (Rechengeld) として機能するだけだから、ポンド、シリング、ペンス、ターレル、フラン等々の名称は、金または銀の重量部分、またはなんらかのしかたで対象化された労働を表現するものではなく、むしろ観念的な価値諸原子 (ideale Wertatome) を表現するものである、と主張」する学説である (*ibid.*, S. 59-60; 59頁)。

先の説明を勘案するならば、貨幣の、または、価格の度量単位が観念的に定められるべし、とする学説であると解釈できる。そして、「価格規定にあっては、ただ表象された金か銀かが機能するだけであり、金と銀はただ計算貨幣として機能するだけ」といわれていることから、「表象された金か銀」と「計算貨幣として」の金か銀とは同義であることが分かる。これは金か銀を一般的等価物として商品の価値を表象ないしは計算するという意味であろう。価値表現または値づけという行為において、それ自体は観念的な所作であってもなんら問題ではないはずである。問題はその後、先、「ポンド……等々の名称は、金または銀の重量部分、またはなんらかのしかたで対象化された労働を表現するものではなく、むしろ観念的な価値諸原子を表現するものである」という一文にある。

金や銀が計算貨幣として機能しうるのは商品に価値が内在しているがゆえである。にもかかわらず、「貨幣の観念的度量単位説」では、無規定の価値を直接に名指し計算しようというのである。しかし、そこで計算されるべき価値とは何かが当該学説では説明されていない、という批判であろう。

みられるように、「貨幣の観念的度量単位説」は貨幣の価値表示機能を重視する学説であるといえてよいであろう。だが、その含意は論者によって様ではない。貨幣の度量単位が観念的に定められるべきである、あるいは、観念的に定められているという理解に立ったとしても、観念的な度量単位のもとで、それが価値に結びつけられるべきか、それとも、金属重量に結びつけられるべきかという点については争う余地がある。

「貨幣の観念的度量単位説」が「完全に展開された」といわれるステュアートの学説において、「計算貨幣とは、売られる物の相対的価値を測るために発明された、等しい諸部分からなる任意の度量標準にほかならない。計算貨幣は、価格である鑄貨とはまったく異なるものであって、たとえばあらゆる商品にたいする比例的等価物である実体がこの世になくとも実在しうるであろう」と言及される。このように、ステュアートにとっての計算貨幣は「売られる物の相対的価値を測るため」の尺度単位にすぎない。「だから貨幣単位は、価値のどの部分にたいしても、不変な一定の比率をもちうるものではない。すなわち、それは金や銀、または他のなんらかの商品の一定量の固定できるものではない」とされ、不変の価値尺度論が否定されるのである。あくまでも、「貨幣は等しい部分からなる観念的度量標準である。もし一つの部分の価値の度量単位はなんであるべきかときかれらば、私は別の質問でこれに答えよう。一分、一秒の標準的な大きさはなんであるか？ と。それらはなんら標準的な大きさをもたない。だが、その一部分が決定されれば、残りの全体は、度量標準の本性にしたがって、比例的にきまってゆかざるをえない」(*ibid.*, S. 62-3; 62-3頁)。

ステュアートにおける「貨幣の観念的度量単位」、すなわち計算貨幣とは、価値比例性を示す計算単

位である。価値比例性さえ担保されれば、あとはそれ自身の「本性」によって比例的に価値量を量ることができる。ステュアートの計算貨幣論で問題になりそうなのは、彼自身が気にしているように「標準的な大きさ」がいかにして決まるのかという点と、「等しい諸部分からなる任意の度量標準」がいかにして任意に決められるのかという点であろう。つまり、「貨幣の観念的度量単位説」の内部には、ステュアートのように価値尺度の価値比例性のみを求める論者と、それと同時に、価値尺度の不変性をも求める論者が存在しているということである。マルクスとステュアートは、価値表現が観念的になされうという点、価値が比例的であるという点、価値尺度が可變的であるという点で一致している。一致していないのは価値の実体としての一般の労働時間を認めるか否かという一点である。

マルクスは、「ステュアートは、たんに流通で価格の度量標準としてまた計算貨幣として現れる貨幣の現象にだけかかずらっている」(ibid.)と述べている。マルクスは、価格の度量標準、計算貨幣、等置、表現を同義的な概念として整理し、ステュアートの貨幣論には観念的な表現論しかないと論評するのである。観念的の意味は二重である。価値表現には価値実現が伴わなければその価値は実証しえないし、価値の実体がなければその形態を通じて現前させることはできない。つまり、表現は観念的であってもよいが、価値は観念的であってはならないということだろう。この場合の観念的という概念をどのように把握すべきかは問題である。抽象的な人間労働として措定される価値の実体も観念的な概念である。ここでいわれる観念とは、価値の実体やなんらかの商品実体との関連性が切断されているという意味であり、その無規定性あるいは経済的な実体との無関連性によって説明不可能な概念に化してしまっているという趣旨であろう。

さらに、「等しい諸部分からなる任意の度量標準」において任意に決められるものは何かということが判然としない。このことが、「15, 20, 36 という数的比率がいまやすべてを語っており、1

という数字が唯一の度量単位となっている、と。比率の純粹に抽象的な表現は、一般にただ抽象的な数的比率そのものであるにすぎない。だから首尾一貫するためには、ステュアートは、たんに金銀だけでなく、それらの法律上の洗札名をも放棄すべきであった。彼は、価値の尺度の価格の度量標準への転化を理解していないので、当然に、度量単位として役立つ一定量の金は、尺度として他の金量に関係しているのではなく、価値そのものに関係していると信じる。諸商品はそれらの交換価値の価格への転化によって、同名の大きさとして現れることから、彼は、それらの商品を同名のものにする尺度の質を否定する」(ibid.)という解釈をもたらす。

おそらく、「一分、一秒の標準的な大きさはなんであるか？」と。それらはなんら標準的な大きさをもたない。」というステュアートの問いにたいするマルクスの回答は、一般の労働時間という「標準的な大きさ」を持つ、ということになるだろう。たしかに、事物の純粹な相対比率を示す尺度単位を考えることはできるが、商品価値の相対比率は事物と同じように客観的に与えられるものではないだろう。「円周の360分の1を度とよぶかわりに、180分の1を度とよぶこともできるであろう」(ibid.)が、異質な使用価値を有する商品の相対比率を事物と同じように客観的かつ任意に決定することはできない。事物における尺度単位がその事物のもつ自然的属性に規定されるのと同様に、商品価値の尺度単位は価値がもつ社会的属性によって規定されなければならない。「標準的な大きさ」や規定された大きさのない尺度単位で価値を量ることはできないのである。

ステュアートを除けば、「貨幣の観念的度量単位説」の基本的な問題関心は、磨滅・改鑄・盗削によって減価した金鑄貨——またはそれを代表する減価した銀行券——で支払われ、契約された債権にたいして完全な重量を持つ金鑄貨で返済すべきであろうか、ということであった。一つの回答として、「観念的貨幣尺度説」(Marx [1859] S. 64; 64頁)の代表的論者とされるアトウッドの説が提示される。アトウッドによれば、名目上は契

約時と同じ価格で返済すべきであるが、しかし、同じ名目上の価格1 シリングは78分の1オンスの金を代表すると度量標準によって設定されていたとしても、磨滅した鑄貨の価値で契約されたのであれば、返済時には鑄貨の磨滅率と同じ比率で切り下げたシリングで、たとえば、90分の1オンスの金で返済されるべきである。つまり、契約時の名目上の価格で支払われなければならないのか、それとも契約時の価格が含んでいた金属重量を支払われなければならないのか、ということが問題なのである。「観念的貨幣尺度説」では、貨幣は常に金属重量の価値を表示しなければならないのであるから、支払われる価格には、後者の、つまり契約時に支払われなければならないとされていた金属重量が含まれなければならない。たとえば、契約時に78分の1オンスの金を1シリングと呼ぶと度量標準で定められていたとしても、その1シリングが実際には90分の1オンスの金しか含んでいなかったとすれば、90分の1オンスの金が1シリングと呼ばれるべきなのである。

マルクスは「アトウッド自身の学識のほどは、尺度としての貨幣の機能にかんするかぎりでは、次の引用文のうちにあますところなく要約されている」(ibid., S. 65; 65頁)と述べ、エンダビー(Enderby, C.)にバーミングダム学派を代表させて論及している。エンダビーはピールにたいし「現在の価値の度量単位はなんと解すべきであろうか?……3ポンド17シリング10ペンス2分の1、これは1オンスの金を意味しているのか、それともその価値を意味しているのか?」と問い、「ポンド (£) という表現は、価値に関係をもつが、金のある不変の重量部分に固定された価値に関係をもつものではない。ポンドは一つの観念的な単位である。……労働は、生産費がそれに還元される実体であって、それは金にたいしても鉄にたいしても、その相対的価値をあたえる。だから、一人の人の一日または一週の労働をあらわすために、どんなに特殊な計算名が用いられようとも、そういう名称は生産された商品の価値を表現するのである」(ibid.)と答えている。

エンダビーは、「価値の度量単位」は、金重量

ではなく、その価値に関係していると述べている。先の引用文中で、アトウッドはその価値を金属量に結びつけていたが、エンダビーにとっての価値とは「生産費に還元される実体」としての労働である。とするならば、1ポンドは一定の金重量ではなく、一定の労働量を表していることになる。そこで、もし価値に直接の度量単位が設定できるのであれば、「労働時間が貨幣の直接の度量単位」(ibid., S. 66; 66頁)と述べるグレイの労働本位説への道が拓かれるであろうと推論されるのである。これをもって「観念的貨幣尺度にかんする論争」はグレイの労働貨幣論に帰着するという評価が与えられ、論争史が閉じられるのである。

ちなみに、「観念的貨幣尺度」のうち、観念的とは価値表現を貨幣の唯一の機能として独立化させる見解を指すが、貨幣尺度についての明確な説明はない。「尺度としての貨幣の機能」という一文を付度するならば、価値尺度としての貨幣か、貨幣の度量単位、または価格の度量標準のことを指していると思われる。

観念的な貨幣学説による価値尺度論の論点は、比例性(均等性)、不変性、任意性の3点に絞られた。価値尺度を名指すときには何らかの名称が与えられなければならない。価値を表示する貨幣に単位名称を与えるという所作はたんなる定義であり、それは任意に行われうるだろう。金貨幣であれば金量の名称がポンドと呼ばれようが、円と呼ばれようが、共通に認識可能な単位名称であればどのようなものでも構わないはずである。だが、金が貨幣と認められている市場において、ある商品所有者が「私は小麦を貨幣と呼ぶ」と宣言したとしても、そのことが即座に他の商品所有者によって承認されるかは定かではない。つまり、度量標準の任意性とは、単位名称に関するものであって、貨幣商品の選択に関するものではない。

度量標準の比例性、その「標準的な大きさ」の比例性については、ステュアートが言及したように度量標準の本性によって確保されるということができない。目盛が不均等な定規によって長さを測ることはできない。計算可能性は尺度単位の比例性によって担保されているのは確かではないだろう

うか。加算減算が可能な対象は同質的な事物のみであり、異質な使用価値に同質的な価値を見出すマルクスの論理的な手続きも、計算可能性や知覚可能性の必要性からもたらされていた面がある。

度量標準の不変性については2つの論点がありうる。1つ目は、貨幣の単位名称の不変性である。単位名称、価格の度量標準は、任意に定められる定義であるので、不変に維持することもできれば、変更することもできるだろう。2つ目は、度量標準が示す金属重量または価値の不変性である。これはマルクスもステュアートも否定している。価値は、マルクスのように一般的労働時間をとるならば労働生産性の時間的変化や空間的差異によって変化するし、ステュアートによれば「商品の価値は、それに影響を及ぼす諸事情の一般的な結びつきと人間の気まぐれとによって左右されるものであるから、その価値は、ただ商品相互の関係で変動するものとして考察されなくてはならない」(ibid., S. 63; 62頁)。

貨幣1単位の価値を不変に保つとはいかなることかがそもそもの問題ではあるが、価値も定義によって与えられる便宜的な概念であると考えれば、金属量で量った価値を一定にすとか、労働量で量った価値を一定にするという考え方はありうる。貨幣の一般的な購買力を一定に保つということも、それ自身にいかなる意味があるかは疑問であるが、技術的には可能であろう。

単純流通という理論的想定に制約されて、価値尺度の観念性に関する考察から信用貨幣論の争点に接近できるのはここまでである。とはいえ、単純流通から信用論への架橋を示唆する一節がある。

「観念的貨幣尺度説が、銀行券の兌換性または不換性にかんする論争問題で新たな重要性を得たことを注意しておこう。①もしも紙券がその名称を金や銀から受け取るとすれば、銀行券の兌換性、すなわちそれが金や銀と交換されうるということは、法律上の規定がどう言っているが、依然として経済法則である。②だから、プロイセンの紙幣ターレルは、法律上は不換紙幣であるとしても、日常の取引で銀ターレル以

下にしか通用しなくなり、したがって実際に兌換不能になれば、ただちに減価するであろう。③だから、イギリスの不換紙幣の徹底的な主張者たちは、観念的貨幣尺度へ逃げこんだのであった。もしも貨幣の計算名であるポンド、シリング等々が、一商品が他の諸商品との交換で、あるときは多くあるときは少なく吸収したり吐きだしたりする一定量の価値原子にたいする名称であるというのであれば、たとえばイギリスの5ポンド券は、鉄や綿花となんの関係もないのと同じように、金ともなんの関係もない。④5ポンド券という称号は、この券を金またはなんらかの他の商品の一定量と理論上等置することをやめてしまっているのだから、その兌換性の要求、すなわちそれをある特定の物の一定量と実際上等置しようとする要求は、その概念そのものによって排除されることになるう」。(ibid., S. 66; 66頁, ①-④は引用者による)

この一節で言及されている内容をさしあたり4つの論点に整理してみると、多くの論点が凝縮された難解な節であることが分かる。①兌換銀行券であっても、不換銀行券であっても、金や銀から名称を受け取る銀行券は兌換されなければならない。②不換紙幣(不換銀行券)である紙幣ターレルの価値が、鑄貨である銀ターレルの価値以下に減価した場合、発券時に約束した比率での兌換が不可能になり、紙幣は減価する。③貨幣の計算名が一定量の価値原子にたいする名称であるならば、5ポンドの銀行券は商品とも金とも関係していない。④5ポンドの銀行券は、金または商品との等置をやめているので、〈兌換性=実際上の等置〉の要求は概念的に排除される。

①銀行券の兌換性が度量標準との関連で言及されている。銀行券の名称を金銀から受け取るということが兌換の条件であるといわれているように読める。さらに同じ条件のもとでは、不換銀行券でさえ兌換から免れないといわれている。後者のくだりは、銀行券の債務性について言及した内容であろう。兌換銀行券であっても不換銀行券であっても銀行債務であることには変わりはないという

趣旨に解したいが、名称を受け取るという点についてはどう解すべきか。②不換銀行券が同一額面の铸貨価値以下に減価した場合について述べられている。ここではいかなる経路をたどって銀行券の価値が変動するかが追究されなければならないだろう。③がポイントであるように思われる。マルクスの理解では、観念的貨幣尺度とは、銀行券の額面が商品とも金とも無関係に決定されているということである。そして、④観念的貨幣尺度としての銀行券は金や商品との等置をやめているので、兌換性、つまり実際上の等置をもやめてしまっているといわれるのである。観念的貨幣尺度としての銀行券は商品や金と等置されない銀行券であるととらえられ、銀行券の兌換性を実際上の等置と解釈している。金債務証券としての銀行券は金と銀行券との等置であり、不換銀行券であってもポンドは金債務証券であることには変わりがない。不換銀行券の名称を金銀から受け取るならばその紙券は中央銀行資産にある金銀に裏付けられているはずであり、法律上の不換を宣言したとしても、実際に兌換を拒否することはできないという意味だろう。しかし、もしかりに、銀行券の名称を特定資産を連想させないような名称にしたらどうなるだろうか。「もしも紙券がその名称を金や銀から受け取るとすれば」を条件文として読むと裏づけ資産との対称性が想起できないという単純な齟齬が生じる。そこでこの条件文の「金や銀」の部分何か別の文言に修正してみたい。たとえば、「金や銀」が指示する対象は中央銀行資産であろうから、そこに含まれるなんらかの商品で代替してもよいのではないだろうか。その場合、不換銀行券としての債務証券からは特定の資産との関連性が失われ、価値のような抽象的な対象を想定せざるをえないことになろう。

観念的な貨幣学説の主張は最後の論点と表面上類似しているものの内容上は根本的に異なっている。なぜなら、価値原子の名称が付された銀行券には兌換の必要性がなく、したがって観念的貨幣尺度としての銀行券には債務性がないためである。商品に内在する価値原子を直接に名指すことができれば、紙幣はその相対価値を表示するだけでよ

く、それ自身が価値のあるモノと関連づけられる必要がないのである。その意味で、計算貨幣論にいわれるように究極的には貨幣媒体自体の必要性もないのかもしれない。

《注》

- (1) 本節では表1にしたがって各説を位置づける。
- (2) Marx [1859] や麓 [1967] では正確に「不換紙幣 (inkonvertiblen Papiergeldes)」(Marx [1859] S. 66: 66 頁) と呼ばれている。つまり、不換銀行券=不換紙幣は自明であるが、不換紙幣=国家紙幣は自明ではない。不換紙幣が国家紙幣となるためにはもう一段論理が挿入されなければならないだろう。
- (3) だが、非商品経済的論理の介入によって、国債の商品性を否定してしまうことは、封建領主のような地主が得ている地代等(物納を含む)の権力関係に源泉を有する収入や商品の解釈を難しくしてしまわないだろうか。そればかりか、純粋に商品経済的な富とは何かという新たな問題を提起してしまわないだろうか。
- (4) とはいえ、中央銀行のバランス・シートが悪化すれば実証しなければならないときがくることは避けられないであろう(結城 [2011])。さらに、具体的に考えていくと、どのような方法で債務を履行するのか、という問題が現れる(泉 [2011])。
- (5) 第127回事業年度(平成23年度)決算等について(<http://www.boj.or.jp/about/account/zaii1205a.htm/>)により作成。
- (6) 一般に standard, standard of value は「本位」と訳されるが、本位概念とは価値尺度と度量標準の混同ないしは合成概念であるという解釈を素直に表明するために「価値標準」と訳される場合もある。本稿では文脈に応じて使い分けられてきた従来の用語法を踏襲し、訳語の検討は今度の課題としておく。
- (7) 価値尺度の含意は重層的である。本稿では、商品の価値を貨幣の量で表すという価値表示機能とそのための媒体の意味で用いる。ちなみに、貨幣の支出(購買)による価値量の確定を価値尺度機能と呼び、価値表示機能+表示媒体としての価値尺度と区別する。
- (8) 1816年の条例でソブリン金貨を本位貨幣に定め、1819年のピール条例でイングランド銀行による正貨支払の再開を決定、21年に完全実施。旧平価(金1オンス=3ポンド17シリング10.5

ペンス)への復帰。

- (9) 「金銀複本位」(Baring, A.), 「銀本位」(1816-9 まで Ricardo も支持), 「紙幣本位」(Attwood, T.), 「指数・計表本位」(Jones, C.), 「労働本位」, 「穀物本位」(Muntz, G. F.) などがある。

参考文献

- 泉正樹 [2009] 「計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評：価値概念の観念性について」『東北学院大学経済学論集』第 172 号, 39-60 頁
- 泉正樹 [2011] 「不換銀行券と商品価値の表現様式(1)：現代の不換銀行券の原理的把握に向けて」『東北学院大学経済学論集』第 178 号, 111-39 頁
- 泉正樹 [2012] 「不換銀行券と商品価値の表現様式(2)：小幡道昭の貨幣・信用論に学ぶ」『東北学院大学経済学論集』第 178 号, 11-42 頁
- 泉正樹 [2013] 「貨幣の本源的な概念についての覚書」『東北学院大学経済学論集』第 180 号, 15-44 頁
- 春井久志 [1986a] 「T. アトウッドと貨幣本位問題」『名古屋学院大学』《社会科学篇》, 第 22 卷第 3 号, 1-26 頁
- 春井久志 [1986b] 「T. アトウッドの初期貨幣理論, 1816-1819 年」『金融経済』No. 217, 1-24 頁
- 西沢保 [1984] 「1840 年代のバーミンガム学派：異端の経済思想」『一橋論叢』第 92 卷第 1 号
- 西沢保 [1994] 『異端のエコノミスト群像：19 世紀バーミンガム学派の経済政策思想』岩波書店
- 結城剛志 [2011] 「地域通貨論をめぐる問題状況：信頼説を中心として」『季刊・個人金融』Vol. 5, No. 4, 56-68 頁
- Attwood, T. [1816] *The Remedy: or, Thoughts on the Present Distresses, Selected Economic Writings of Thomas Attwood*, London, 1964.
- Hawtrey, R. G. [1928] *Trade and Credit*, London, New York, Toronto: Longmans, Green and Co. (経済同攻会 [1931] 『景気と信用』同文館)
- Marx, K. [1859] *Zur Kritik der politischen Ökonomie, Karl Marx Friedrich Engels Werke*, Band 13, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962. (杉本俊朗訳 [1964] 「経済学批判」『マルクス・エンゲルス全集』第 13 卷, 大月書店)
- Schumpeter, J. A. [1954] *History of Economic Analysis*, London: George Allen & Unwin Ltd. (東畑精一, 福岡正夫共訳 [2006] 『経済分析の歴史』中, 岩波書店)

《Summary》

Fragments on the Theory of Credit Money and Cartalism

YUKI Tsuyoshi

This is a fragmental note for studying the theory of Credit Money and Cartalism. This note includes three fragments. The first fragment summarizes the theoretical understandings of the system of modern inconvertible bank notes. The second fragment describes the precedence studies in the theory of Cartalism. The third fragment introduces and considers the examination of ‘the theories of standard of money’ in “A Contribution to the Critique of Political Economy” (Marx [1859]).

How to understand the modern inconvertible bank notes is a very hot issue: It has been debated whether the notes are credit money or state paper money. The ‘inconvertible bank notes debate’ proposed a critical point of the theory of credit money that cannot explain the connection of gold money and inconvertible paper money. Traditional money-credit theory explains the credit money as convertible bank notes based on gold money, but the theory does not explain the inconvertible bank notes based on gold or any commodities consistently. The state money theory seems to explain the inconvertible bank notes successfully, but this theory has some theoretical inconsistency, too. In order to understand the modern system of money, this note summarizes the debate and picks up three issues, the concept of commodity, the interpretation of national bond as commodity, and the understanding of convertibility.

The second fragment describes other doctrines explaining the inconvertible bank notes named cartalistic money, that is paper money which is not a commodity and contains no metal. The famous cartalist Birmingham school in the 19th century is criticized as ‘inflationist’ by Hawtrey [1928] or determined as ‘the doctrine of the ideal measure of money’ by Marx.

The third fragment examines the definition of ‘the doctrine of the ideal measure of money’ and another version of cartalism, ‘the theory of the nominal standard of money’. The former theory is represented by Attwood and other Birmingham school theorists, the latter theory is represented by Steuart. Their considerations imply that these ideal money theories include three conditions of the ideal money: proportion to value, invariability of value, and arbitrariness of fixing a standard. However, we cannot approach credit money theory on this theoretical level, and we still have few clues between simple commodity circulation and the level of credit theory.

Keywords: Credit Money, Cartalism, Inconvertible Bank Notes